

23. 《室町時代に登場した中野長者、白金長者》

ヨーロッパが、ペストの流行により既存社会の維持が困難となって、新たな社会に向けて歩んでいた頃のこと。日本では南北朝の内乱状態でしたが、長い元号である応永年間（1394－1427 年：北朝の元号）を迎え、足利義満が金閣寺を造るなど繁栄を謳歌していました。ではそのころ、武蔵国では、何が記録されているのでしょうか？

新宿に、中野長者伝説があります。鈴木九郎という人が、応永年間に、紀州から武蔵国多摩郡中野村（現東京都中野区）にやって来ます。馬の売買や荒地だった中野付近の開拓で成功し、近郷の誰よりもお金持ちになったことから、中野長者と呼ばれるようになりました。

地下鉄丸の内線中野坂上駅の近くにある成願寺が屋敷跡とされ、また新宿中央公園に隣接した十二社熊野神社が紀州の氏神を祀ったものだそうです。南北朝の対立など内乱が続いていたから、きっと馬が高く売れたのでしょう。

また応永年間、南朝の国司であった柳下上総介が、武蔵国豊島郡と荏原（えばら）郡の境界上を開墾して白金村を開きました。これが港区白金の始まりです。彼は白金長者とよばれ、その屋敷跡が国立科学博物館附属自然教育園にあったそうです。現在も家を囲った土塁が残存しています。

“白金”という名前からして金融業も営んでいたかもしれません。そうであれば、畿内に誕生していた“土倉”という金融業が、武蔵国でも成立していたことになります。当時の武蔵国の社会経済状況は通説以上に進展していた可能性があり、さらなる研究が待たれるところです。

写真は、①位置図（Yahoo 地図に細見が追記）、②十二社熊野神社（細見撮影）、③白金長者屋敷跡（附属自然教育園 HP の掲載写真に細見が追記）

①



②

